
ライダールート

眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダールート

【Nコード】

N4991BA

【作者名】

眼鏡

【あらすじ】

紫髪で女神のライダーです。
ライダーに幸福を。

シロウ&キャスターです。

第一話　死で会った

死んでも良い人間っていると思うんだ。殺人鬼、強姦魔、詐欺師、頭が狂った者、等等など。

悪徳は栄え美德は不幸になる。

命の重さは平等じゃない。

だが死は平等にやってくる。

遅いか早いかだ。

いつもの如く、獲物を探して、夜の町をぶらぶらしていたが、獲物は見つからず公園のベンチに座っていた。

そんな時に、本を一冊だけ手に持った学生服の男が、現れた。

懐から鏡を出して確認した。

「時は金なり」だが「果報は寝て待て」だな。俺は獲物に、にこやかに爽やかと声を掛けた。

「こんばんは。君さ、殺されても文句を言え無いような事しただろう」

学生は、本を握り、うろたえた顔で、こたえた。

「ハアッ、お前、突然、何を言ってるんだ」

「ん、その顔は自覚ありか、俺に会ったのが運の尽きだね」

此処は人通りが多そうだし、さっさと終わらせるか、そんな事を考えて一言「さようなら」と声を掛けて、頸動脈を切った。

血しぶき上げてピクピクした後こと切れた。

ワカメ頭の男が持っていた本を拾い、ポケットから財布を抜き素早く移動した。

その後、コンビニに寄り食べ物など買って町の外れにある掘っ建て小屋に戻った。

さっき拾った本を読もうとした時に突然、声が聞こえた。

「マスター、その本を私に譲ってくださいませんか」

目の前には、綺麗な紫色の髪を地面に触れる程に伸ばし、真珠のように美しい真っ白な肌で、唇は艶やかだった。

額には梵字のようなモノが書かれていた。唯顔はアイマスクのような眼帯をして鼻と口元しか見えないが容易に綺麗な顔立ちが想像出来た。

そこには女神がいた。

声を掛けられるまで、まったく気付けなかった。

多分だが、悪意が無かった事と存在感が薄くて、気付くのに遅れたのだろう。

ふと思ったが、この美人さん目茶苦茶に怪しい格好をしているな、

綺麗すぎて不自然さが何処か遠くに飛んで行っていた。

首にベルトしてるし、服を見てSMかなと阿呆な事を考えた。今は、そんな事を考えてる場合じゃなかった。

この女が本気出したら死ぬな。今更、臨戦態勢も無意味か、とりあえず聞いてみる事にした。

「何故、この本が欲しいんだ」

俺が聞くと、彼女は切羽詰まったように言ってきた。

「マスター、先に血を頂けませんか、このままでは私は消えてしま
う」

真摯な表情で、顔は見えないけど、頼まれて俺は頷いていた。

手首から血を出すか、と思い服を捲くっていたら突然、がぶつと首筋に噛み付かれた。

なんか気持ちいい、柔らかくて良い匂いだ、もう本当に色々和本気でヤバすぎた。

ぶつはあ、そんな声を出しながら彼女は血を吸い終えた。

「ご馳走様でした。美味しくて癖になりそうです」

「それは良かった」

俺も癖になりそうだ。

さっきまでは貧血だったのか、頬がほんのり赤くなり、顔色が良くなった。

「本当に助かりました。それと私の名はライダーです」

「俺はキシだ」

それから何故俺をマスターと呼ぶのか聞いてみると、ライダーは聖杯戦争の事や何故本を返してほしいか話し始めた。

「あのワカメに命令され学校にある仕掛けをしました。ただ偽臣の書のせいなのか、マスターとのラインが途切れ魔力不足になり意識朦朧としていた時に、貴方が現れた。」

そして今に至ります、そう話しを締めくくった。

俺は、マスターの復讐をしないのかライダーに聞いてみた。

ライダーはワカメが嫌いで、本当のマスターでもないのに、別に復讐する気は無いと言った。

それにしても、

「聖杯戦争の事を話す必要が、あったのか、俺が悪い人間だったらどうすんだ」

俺が、そう聞くと。

「マスターと呼んでしまったので。それに大丈夫だと、言うなれば勘ですね」

後、本を返して欲しい理由が。マスターが心配なのでマスターの元に戻りたい、そう言う理由だった。

少し考えてから、

「じゃあ返すわ、あんまり興味ないし」
そう言った。

「ありがとうございます」
そう言い微笑んだ気がした。

それから少し躊躇いながら、
「後一つ、お願いが私と性交をして頂けませんかと真面目な表情で言われた。

ライダーの話を簡単に言うと魔力不足で、血では大量に飲まないと回復しないが、性交をすれば効率的に大幅に回復する。

今の状態では敵から逃げる事も出来るか分からない、迎撃出来る程度には回復したい。

そう言う事、らしい。

「いいけどさ、久しぶりだから手加減は出来ないよ」

「手加減しなくて大丈夫です」

そして俺は灯りを消した。

くくくく

白衣の大人達に囲まれて様々な検査をしてから「K i 4」と言う番号をもらった。

此処に居る子供達は全員が昔の記憶を無くしている。

特に疑問も無く訓練として殺し合いをした。その結果、仲間は今々と死んで行った。効率的な人の殺し方、逆にどうやれば人を長時間苦しめ生きながらえさすか、武器の扱い方、ありとあらゆるモノを学んだ。

そんな中で「きし」と俺に名前を与えてくれた奴がいた。

それが「K i 1」「きいち」だ。

「きいち」とは此処に入ってから一番長く一緒に居たが。

しばらくして「きいち」は狂い暴走し、俺が殺した。

そんな俺は強化手術を受ける事になり、手術台におとなしく座っていると研究者の声が聞こえてきた。

「K i 1を暴走させて良かったなあ、素晴らしい結果だ」

その話が聞こえた後、完全に麻酔が全身に回り意識は消えた。

目覚めた後、俺は暴走して研究者や仲間を皆殺しにして、そこから逃げ出した。

それから自分の容姿が変わっている事に気が付いた黒髪黒目が若草

色の髪に鮮緑色の瞳になっていた。

俺は放浪して女魔術師の世話になり、そこでしばらく暮らして普通の生活や魔術の勉強をしたが殺人衝動が抑え切れないので出て行く事にした。

そして、今の俺が出来あがっていった。

第二話　繋がる二人

最初は夢を見ていると思っていた、俺の幼少時の夢と少女の夢を交互に見ていると思った。

だが、あれは夢と言うにはリアル過ぎて少女の記憶の中に入り込んだ感覚だった。

それに、あの少女は…。

そんな事を考えながら、まだ俺の胸の中でぐっすりと眠っているライダーを見た。

それにしても昨日は、はっちゃけ過ぎた中学生の青い春ぐらい気合が入り執拗に攻めた。

これが女に溺れると言う事なのだろうか、そんな事を考えながらライダーの紫色の長い綺麗な髪を撫でたり梳いていると眼帯ごしに、目が合いじつと見つめ合った。

「起きたのか。所でさ、夢を見た。ライダーは何か見たか」
思い切って聞いてみた。

ライダーは少し躊躇い、
「私も、見ましたよ」
そう言った。

「そうか」
俺はライダーの昔の記憶を見、そしてライダーは俺の昔の記憶を見たのだろう。

俺達二人は少し似ているようだな、人を沢山殺し、怪物に。

なんだかな、と思いながら服を着ようとした時に、腕をガシッと握られ引っ張られた。

「それは令呪。そんな…、パスが繋がってる。どうして」
ライダーは、あたふたしていて可愛かった。

俺は少し考えて話し始めた。

「憶測だが昨日、張り切り過ぎて何度もしたろ、それで強引に繋がったんじゃないか」

「なっ、そんな事が。でも確かにそれ以外には考えられない。どうしてくれるんですか」

最後の方は泣きそうな声でライダーは言った。

「ライダーだって、スッゴク喜んでたろ。だから昨日は頑張っただけだよ」俺は真面目に、そう答えた。

「なっ、今そんな事を言わないでください」
ライダーは頬を赤らめながら、そう言った。

最初に、昨日の事を切り出したのはライダーなのにな、そんな事を考えながらライダーをからかうのが楽しくて、言い合いを続けた。

それから、これからの事を話し始めた。まずマスターと呼ばれるのがムズ痒いので奇詩で良いと言い、主従にも抵抗があるので対等な

関係だと頼んだ。

「ライダーは、この聖杯戦争でどうしたいの」

「私は桜を助けたい、です」

「なら、そうしようか」

「良いんですか」

「特に、やりたい事ないしね」

「ありがとうございます」

笑いながら言い。

「改めて言います、ライダーのサーヴァント、真名はメデューサです」

その後、ライダーは自分の宝具の事など、詳しく色々と教えてくれた。

俺達二人は作戦を練っていた。それは「桜救出作戦」またの名を「臓硯爺抹殺計画」だ。

何故こんな事になったかと言うと、ライダーの「真元マスター桜」の体の中に蟲が居る。その蟲を殺さない限り桜の命は臓硯の手の中にある。

蟲をどう退治するかと頭を悩ませていたが特に良い案も出ず、日が暮れた。

夜になり飯を買いに行く事にして外に出た。少し歩いた所に、それは、いた。

第三話　イリヤ強襲

俺は二度見した。

ムキムキマツチョで馬鹿みたいにでかい体に、剣のような鈍器を持ち、威風堂々と立っている灰色の巨人。

そして、その横に居る白い少女が話し始めた。

「まったく、人の庭に隠れているマスターがいるとは思わなかったわ。バーサーカーやっちゃっいなさい」

そして巨人は、猛然と向かってきた。

勝てるのか、これ。

あの鈍器に一発でも当たれば終わりだな、ただ当たってないのに太刀風で傷だらけだ。

既にナイフ三本が駄目になってしまった。ライダーの攻撃を受けても巨人は、かすり傷一つ付いていない。四本目が壊れた。

素早く動き回り、杭に鎖が付いた武器で戦っているライダーに大声で聞いてみた。

「ライダー、倒せるか」

ライダーは俺の近くにおりて、「厳しいですね、宝具を使えばなんとか」

だよな、マスターの方に行こうとすると巨人が邪魔するし、どうし

たもんか。そんな事を考えていたら、巨人はおとなしくなり、少女が話し掛けてきた。

「貴方のサーウ、アント、ライダーなんだ。最初はアサシンかと思っただわ、いやらしい服に体をしているから、それにしても私のバーサーカーの方が断然に強いわね」

わざわざ、それを言う為に巨人をおとなしくさせたのか、つかいやらしい服と体。アサシンって、どんな偏見だ。

「まあそうヤツカムな。いくらライダーがボンツキュッボンツの美人で、自分がチンチクリンだからって、な」

「なんですって、私だって将来はバーンなキューンのドーンで綺麗なレディになるんだから、これだから下品な男は嫌だわ。バーサーカーさつさと殺しなさい」

白い少女が話していたが、かまわずライダーに話し掛けた。

俺がライダーに作戦を話し終えた所で、巨人は大きく吠え突進してきた。

しばらく奮戦しながら戦い。

もう、そろそろ行けそうな気がするんだがな、俺は力いっぱいナイフを振り抜いた。

ガキッとした音とともにナイフは折れ、それに続きバーサーカーの

腰の鎧が落ちた。

おっし、作戦通り。

真っ先に反応したのは、白い少女だった。

「キヤー、バーサーカー。いつ一旦、止まりなさい。こっち振り向かないで。そっそれ隠してその斧剣を腰にあてなさい」

それは逆に変態チックを際立たせるだけだろうと思いつながら、なかなか忙しそうだったので、俺達二人は逃げ出した。

それから公園の茂みの中で、話し合っていた。

「あんな作戦が上手く行くとは思いませんでした。それより、怪我は酷くないですか」

「地道に頑張りナイフ五本も犠牲にして成功させた素晴らしい作戦だったろう。それと怪我は治った特殊な体だからさ」

「そうですか」

「おう」

俺達は黙り込んで、しまった。

なんとなくしに、これからの事を考えていたら。

「誰か来るようですね」

「そうだな」

ガサガサと茂みが揺れて、赤毛の青年が現れた。

そいつは、いきなり、

「血だらけじゃないか、怪我してるのか、大丈夫なのか」
そう、まくし立てた。

お人よしだな、と思いながら、「いや、もう治った」
大丈夫だ、と続けようとしていたが。

霊体化していたライダーが現れ「貴方はエミヤシロウですか」そう
言った。

赤毛は少し驚いた顔で頷き、君は、と聞いてきた。

少し躊躇ってから、

「桜の知り合いです」
そう言った。

俺は事の成り行きを見ていた。

第四話　エミヤ邸へ

「此処で待つてくれ」門を入った所でシロウに言われた。ライダーは霊体化している。

シロウは「ただいまー」と言い玄関に入ってゆき、その後に女性の声が聞こえ「シロウ。貴方一体、醤油を買うのに……。」「そして女性の声が途切れたと思ったら、いきなり玄関がバンツと開き魔力の塊が、ぶっ飛んできた。

どおわあっ、間抜けな声で叫びなんとか避けた。シロウが「敵じゃないから、ストップ落ち着いて」と叫んでいた。

「少し臆病で優しい人かな、心配いらないさ」そうシロウは言っていたが、問答無用で殺しにくる女だった、シロウの評価は信用できないな。

なんとか玄関から居間に俺達は移動した。

女性、キャスターはテーブルを挟んで俺達を睨んでいる。

シロウが茶を持ってきてキャスターの隣に座り、話し合いは始まった。

「かくかくしかじか…そこでシロウに出会い今に至る」

俺が今までの事を話し終わるとライダーが話し始めた。

「それで桜の体の中に臓硯の蟲がいて、その蟲で苦しめられ命を握

られています。貴方の事は桜から聞いていましたが、その通りの人物のようで良かった。桜と一緒に助けてくださいませんか」

シロウは頷き、

「ああもちろん協力するさ、良いかなキャスター」

シロウがそう言うと、キャスターは溜め息を吐いて、

「私が反対しても、どうせ聞かないでしょ。貴方達、もし裏切ったら許さないわよ」

キャスターは凄みをきかせて、言い放った。

一応は協力する事が決まり、俺達は行く場所も無いのでシロウの家に泊めてもらい部屋に案内された。

ライダーが、しゅんとした感じで話し掛けてきた。

「すいません。相談もせずに勝手にしてしまい」

「いや、最良の選択だったよ。でも驚いた、いきなり桜の事を話し始めるからさ」

「桜にはエミヤの事を巻き込まれたら助けるように頼まれていましたが、公園で令呪が見えたので既に渦中の渦に居るのなら目に見える所にいた方が助けやすいと思ひまして」

ちなみにライダーがシロウと呼ぶと、キャスターが凄いい形相で睨んできたので、エミヤとライダーは呼んでいる。

「なるほどね、でも屋根がある場所で眠れるんだ良かった」

俺は朝日の眩しさを起きた。

二日連続でライダーを抱いた、自分では女に対して淡泊だと思っていたが違ったようだ。

そんな事を考えてからライダーを起こさないように寢床を抜け出した。

居間に向かうと台所ではシロウが朝飯を作っていた。

「おはようさん。朝早いのに、ご苦労様だな」

「ああうん、昨日はキャスターに無理させたから」

今日の当番はキャスターなんだけどね、と苦笑いしながら言った。

女性二人は少し遅くに起きた。

朝食を食べた後、シロウは学校に行き、キャスターは自分の工房にこもった。

ライダーに魔眼殺しの眼鏡をあげた。

これはある女魔術師にもらった物だが、ライダーにも効くようである。安心した。

そしてライダーの素顔を見たが物凄く綺麗で、想像を超えて、秀麗な顔立ちをしていた。

水晶のような瞳で、瞳孔は四角光は宿らず虹彩は無く、それは魔性の美しさだった。

いつもの過激な服ではなくジーパンにネックセーターの素朴な格好をしていても妖艶で。

俺は悶々となり、自分で自分が情けないと思った。

俺は、この悶々とした気持ちを打破すべく、人殺しに行く事を決め、鏡を取り出した。

そうするとライダーが「何故鏡なんかを持っているのですか」そう糾弾されたので、この鏡の便利さを説明した。

この鏡は昔、詐欺師の親分を始末し家を物色していた時に金庫から出てきた。

四角い手鏡を持ちながら、

「さて次に殺してよさそうなのは何処に居るかな」

そう呟くと手鏡に知らない顔とその下に「住所と名前」が浮かび上がり消えた。

調べた所、親の金や権力で色々揉み消しているようで、とりあえず殺した。

こうして俺は「魔法の鏡」を手に入れた。

白雪姫の「魔法の鏡」のように質問すると答えてくれるんだ。

俺が説明し終わるとライダーは「わかりました。でも私には、見せない、近づけない、出さない、でください」そう言われた。

ライダーは鏡が嫌いだろうし、短慮だったな。

それにしても、

「ライダーは俺が人を殺す事をなんとも思わないのか」
今更ながらに聞いてみた。

「ごく一部以外、人間は嫌いです。それに私の食事と変わりませんよ。ただエミヤには黙っている方が良いでしょう」

それは確かに、正義の味方だし確実に俺は悪役だろう。桜を助けるまでは、バレないようにしないと。

そんなこんなで、人を殺して、学校帰りのシロウに出会った。

そんな感じで数日は穏やかに、暮らした。

第五話　剣と弓襲来

数日後の夜に、ボロボロになってシロウが帰ってきた。

キャスターは心配な顔をして、「シロウ大丈夫なの、何があったの」そう聞いていた。

「サーウ、アントが戦っている所に出くわした。キャスターに魔術を習ってなかったら死んでたよ」

シロウが話し終わって調度に、警報のような音が鳴った。

キャスターは怒った表情で、

「敵が来たわ、迎え撃つわよ」
そう言った。

庭に出てみると、そこには金髪の女と赤い服の女が居た。
そして赤い方が話し始めた。

「こんばんは衛宮君、まさか貴方もマスターで魔術師だったとはね。それに他のマスターとも協力しているようで、なかなかの策士ね」
そんな事を言った。

「遠坂も魔術師だったんだな、知らなかったよ。それで…」

シロウが、まだ続きを話している時に何かがシロウ目掛けて飛んできたので俺は咄嗟にシロウを足を払いして、こけさせた。

その後にはドォンとした音が鳴り、俺達は軽く吹き飛んだ。
続けざまにドンドンと飛来してくる何かを避ける為に塀に近づくと、
それは止んだ。

「おいシロウ、お前は何かやったんだ」

「なんでさ」

「シロウ目掛けて飛んできたんだぞ、狙われる事したんだろ」

「こんな過激に狙われるような事した覚えはないよ」

そんな感じで俺達が言い合いをしていると、赤い女が「これはアー
チャーね」と一言呟いた。

「これ弓でやったのか、冗談だろう、まるでミサイルだぞ」

「アーチャーなら、これくらい出来るでしょ」あんな馬鹿じゃない
の、そんな顔で言われた。

アーチャー凄すぎるだろ、そんな事を考えている白髪の赤い服の男
が現れて、

「殺しそこねたようだ」

そう呟いた。

「いきなり狙撃とは卑怯ですね。それでも貴方は英霊ですか」
金髪の女が、そう言った。

「正当な英霊ではないのでね、それにマスターの命令で偵察をして

いるんだよ、所で君はマスターのように見えるが何者だ」

最初は金髪の女に言っていたが途中で俺に向かい喋った。

「しがない詩人、かな」俺が、そう言うと「ほう」と呟き、襲い掛かってきた。

数合を切り合って俺のナイフは壊れた、そんな時にライダーとキャスターが援護してくれた。

白髪の男は二人の攻撃を飛んで避け「今日は分が悪いようだ、これで失礼させてもらう」そう捨て台詞を吐き消えて行った。

赤服女も「今日の所は引き上げるわ。また今度、仕切り直しましょう」そう言い金髪女と共に帰って行った。

そして残ったのは、ボロボロの塀や家に庭、この惨状を片付けるのって俺達なのか、ナイフも壊れるし散々だな。

だがしかし、キャスターさまさまである。あつという間に魔術で元通りにしてしまった。

俺のナイフも元通りにしてもらおうとしたら「今、そんな事をする場合じゃないのよ。直ぐに此処を強化しないと」そう言い工房に、こもってしまった。

そりゃそうだろうけど、と思いながら俺は悲嘆にくれた。

そろそろ全部、無くなるな。

翌日、シロウの傷は治ったシロウも変な体をしているな、そして普通に学校に行った。

キャスターに家の強化の経過を聞いてみたら、後は時間が必要で二、三日かかるらしい。

そして、やっと俺のナイフも直してもらい、それに加えバージョンアップもしてくれた。

切れ味は増し、とても頑丈になっていた。

ついでに俺の持っている全てのナイフを出して、バージョンアップしてもらった。

キャスターさまさまです。

俺はマジでキャスターに感謝し崇めた、もはや神だ。

昼に俺は一人で町を散策して、ファーストフードを歩きながら食べようとしていた。

そして悲劇は、おきた。

人とぶつかり、昼飯は地へ落ち嫌な音ともに瓦解した。なんてこと

だ、俺の大事な昼飯が。

「これは、すまなかった。よそ見をしていたな」

「いや、いいさ。俺にも非はある」

そして顔を上げて見ると、俺より10cm程でかい、がたいのいい神父服を着た男いた。

「私は、これから食べに行く所なんだが、ご馳走様するので来ないか」

「流石は神父様だ、これも神様の巡り会わせに感謝だな」

メシ屋に着いた。

神父さんオススメの麻婆豆腐を頼んで待っていると。

「君は、なかなか強いな。何か夢でもあるのか」

「そうだな、食い散らかして、飲み込んで、そのうち誰かに、喰われたら、良い、かな」

「詩人のようだな」

「そりゃどーも」

麻婆豆腐がやってきた、俺は直ぐに口いっぱい頬張った。

なにこれ、えっ、はっ、そして俺は訳がわからない叫び声を上げて

冥府をさまよった。

ところどころ記憶が飛び、いつの間にか家に着いていた。

第六話　イリヤ激戦

翌日に、それはやってきた。

「やっと見つけたわ、この前の続きをしましょうか」

白い少女は巨人の肩に乗り堀を壊しながら、そう言い現れた。

立て続けに、これが。

風呂入った後なのにな、そんな事を思い臨戦態勢に入った。

ただ白い少女はシロウに、

「こんばんは、お兄ちゃん。それと初めまして私の名前はイリヤス
フィール・フォン・アインツベルン、よろしくね」
そう言った。

シロウは不思議そうな顔をしていたが犯人とはそうゆう者だ。あんな少女に「お兄ちゃん」と呼ばせるなんて、シロウはそっちの趣味があつたのか、キャスターはシロウを睨んでいた。

「お兄ちゃんも、その男と一緒に殺してあげるね。さあ、バーサーカー！今度こそ、やっちゃついなさい」

少女がそう言い。

巨人は動き出した。

改めて思うが出鱈目だな、せっかくキャスターに強化してもらったが長くはもたないな。

ちなみに腰の鎧は新しくなり、変わっていた。

ここは俺達が頑張つて、さっさと殺すかね。

俺はライダーを呼び、

「ライダー令呪、使うぞ。宝具を使ってバーサーカーを殺してくれ」
そう言った。

ライダーは、わかりました、と言い下がった。
少し時間でも稼ぐかね。

そして大分もったが一本目のナイフが壊れた、その時に。

ライダーはペガサスを召喚して夜の大空に飛び上がり、流星のように突進してバーサーカーに突撃した。

その後は本当に隕石が落ちたような感じだベレルフォン凄いな、
ライダーが俺の近く降りてきたので声を掛けた。

「本当にペガサスなんだな、それと凄く綺麗だったぞ」

「信じてなつかたのですか。それは、ありがとうございます」
最初は意地悪に、最後はクールに言った。

俺は歩いてゆき白い少女に近づき話し掛けた。

「お嬢さん、どうやら俺達の勝ちのようだな」

そうすると少女は笑い、

「バーサーカーを一度、殺したくらいで良い気にならないで」

何を言ってるんだと思ったが。

俺は何かに突然ぶっ飛ばされて、この時は死んだかな、と思った。
遠くまで飛ばされて、ようやくバーサーカーの斧剣で斬られた事が
わかった。

くそついてえ、傷が深いな、つかマジで死ぬ所だったな。

俺は血を吐きながら、

「死は平等に、あるもんだろ」
そう言った。

少女が自慢げに話した、

「せっかくだからバーサーカーの真名を教えてあげるわ。バーサー
カーの真名は、ヘラクレスギリシャの大英雄よ。そして、ヘラクレ
スの宝具がゴットハンド、ヘラクレスには試練と同じ数だけ命があ
るわ」

ヘラクレスって、マジに大英雄だな、つか十二も命あるのか、反則
だろうが、シロウがいるからマスターも殺せないしな、どうするか
考えていたらライダーが声を掛けてきた。

「キシ、生きてますか。大丈夫ですよ」

心配そうな表情でライダーが聞いてきたので。

「直ぐに治るさ、チャッチャと十二回殺して終わりにさせる」

男ならばやせ我慢。と思い言い切ったが、なかなかキツイ。
まあ、ライダーが少し安心した表情で頷いたから良いか。

シロウとキャスターが攻撃しているが、効いてないようだ。

一旦距離をとったので、シロウに声を掛けた。

「よう大丈夫か」

シロウは驚いた顔で、

「いや、キシの方が大丈夫なのか。さつき直撃しただろう」
まともな事を言ってきた。

「少々特殊な体でね、もう殆ど治ったよ」
まだ全然治ってないが、そう答えた。男ならば…。

ライダーに後何回宝具が使えるか聞いてみると。

少女は、貴方変わった体してるのね、と言い。

「良い事、教えてあげる。バーサーカーには同じ殺し方は出来ないわ。十二回それぞれ違う方法で殺さないと殺せないわよ」
楽しそうに、そう言った。

本当に無茶苦茶な英雄だな、後十一回か、どんだけだ、なりふりかまっていられないな。

「ライダー、俺が先に『見る』その後よろしく」

（ライダー）

「わかりました」
私が、そう言つと。

キシは「鎖蛇の魔眼」を発動させて、バーサーカーを見たようです。キシの魔眼は、重圧負荷をかけて相手の動きを鈍らせる魔眼だと聞いていましたが、どうやらバーサーカーに効いているようで動きが鈍くなりました。

キシは、ライダーの事だけ聞くのは不公平だから俺の事も話すよ、
と言いい色々と話してくれました。

それにしてもキシの眼は宝石のエメラルドのように輝いて綺麗ですね。

そして私も魔眼を発動させ、バーサーカーを見ると、バーサーカーは動きが止まり一瞬だけ目の光が消えて、また光が戻りました。

どうやら、もう一度、死んだようですな後十回ですか。

キシは懐から丁字の物を取り出したかと思うと、それは剣になり走りながらバーサーカー目掛けて投げ付け、バーサーカーの胸に当たり、また一度死んだようです。

今度はキャスターが白い少女を操り令呪を使ってバーサーカーを一回目を剣で、二回目を手で、自殺させました。

白い少女は無理矢理にキャスターの束縛をやぶったようで、キャスターに狙いをさだめて集中的に攻撃を始めたので、助けに行こうとした時に。

エミヤが叫び声を上げながらバーサーカーに突進して行き、そうするとエミヤの手には、いつの間にか輝く剣が握らていて、バーサーカーに切り掛かりました。

まばゆい光りが走った後には、バーサーカーが膝を折っている姿が見えました。

くキシく

ヘラクレスは静かにハッキリとシロウに話し始めた。

「見事だ、錬鉄の英雄よ。我がマスター・イリヤを頼む」
シロウは頷いていた。

キャスターの方をチラリと見て。これは、お節介だが、
「キャスターを幸せにしてやってくれ」
そう言うてから。

少女に顔を向け、
「イリヤ、強く生きろ」
そう言い、霧散した。

バーサーカー話せたのかよ、と思いながら膝をガックリ落として、
ため息を吐いた。

一段落したかと思うと白い少女が「バーサーカーの敵討ちよ」と言ってきた。

しかしキャスターが魔術を使い眠らせてくれた。

今日は本当に疲れた。

第六話〜イリヤ激戦〜（後書き）

バーサーカー、死。

4死、ライダー。

1死、魔眼。

1死、キシ。

2死、キャスター。

4死、シロウ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4991ba/>

ライダールート

2012年1月13日21時59分発行